



## 遊びから学びへ — “何もしないでいること” との切ない別れ

島根大学大学院教授 肥後 功一

くまのプーさんのお話が、おとなになったクリストファー・ロビンを主人公とした実写映画になって、この原稿が活字になる頃には日本でも公開されているはず。今（8月半ば）はまだ予告編を観ることしかできませんが、その中に“みんなは「何もしないでいること」なんてできっこないって言うけど、僕は毎日やってるよ”というプーさんの台詞がありました。「プー横丁にたった家」（ミルン作、石井桃子訳、岩波書店）を読んだことのある方は、あれっ？と思われたことでしょうか。

実はこの“doing nothing（何もしないでいること）”は、原作ではクリストファー自身が口にするこぼです。何もしないでいることがいちばん好きだったのに、“僕はもう何もしないでいることなんてできそうもないんだ”と述べて、彼はプーさんたち森の仲間とお別れします。その理由は明示されていませんが、彼が「いってしまふ」ことをなぜみんなが知っているのです。

幼児期を終えたら学校に行くという制度的な理由以上に、子どもたちは自分から「何かをする者」へと成長していくのであり、それは幼児期から既に見られる姿です。牛乳パックやペットボトルを切ってつなげた長いコースを、カーブや落差をつけながら、どうすればドングリをゴールまで転がすことができるか…コースは複雑になるほどおもしろいけれど、それにつれてドングリを転がすことは逆に難しくなる…そんな矛盾をはらんだ、答えが一つではない遊びには、目標、意図、意欲、主体性、試行錯誤、創意工夫、仮説、粘り強さ、友だちとの競争や対立、そして話し合いや協働…などなど後の学びにつながる、いやむしろ学びの本質ともいえるすべてが含まれており、ゆえに幼児期の遊びを学びにつなげてい

くことの重要性に、いま注目が集まっているのでしよう。

夢中になって「している」ことを、少し離れて見る自分（どうしてうまくいかないのかな？どこをどうすればいいのかな？）が出現すること、つまりメタ認知（している自分と、それを振り返る自分の分離）が成立することで、自ら目標をもち、工夫をしながら、強い意志を持ってそれを達成しようとする姿—すなわち学びの姿が生まれます。しかし同時に、そのようなホンモノの学びの姿が出てくるには、まずは我を忘れて（自分が“している”という自覚の手前で）遊びに没頭すること—つまり「何もしないでいる」ともいえる遊びの世界にどっぷり浸る経験が必要です。私たちおとなにできることは、子どもという「生物」がもともと持っている傾向性の本質や意味を理解し、それを引き出したり伸ばしたりできる環境を大切にする事です。そのような中から子どもは自然に、自らを学ぶ者（何かをしている者）へと成長させていくのでしよう。学びにつながるように…というおとなの意図を反映した遊びを計画し、それがどう学びにつながったかという側面を「成果」として可視化しようとする試みが、何をもたらし何を損なうのか、私たちおとなの想像力と思考力が問われています。

学びの世界に入り「何かをする者」になっても、いや、そうやって行き詰まったときにこそ、子どもの頃の「何もしないでいる」世界—「森の魔法の場所」での遊びの経験とつながっていること—が私たちを救ってくれます。おとなになったクリストファーが、どんなふうにかの世界と再会したのか、私も実写映画を楽しみに観てみたいと思います。